

地域で支えるということ

2018年11月7日

介護に頑張っている皆さん
介護関係者の皆さん
国際医療福祉大学大学院 受講者さま

愛知県大府市
認知症鉄道事故裁判 遺族 高井隆一

私は、家族総動員で在宅介護していた父を、鉄道事故で亡くしました。鉄道会社から監督責任として720万円の損害賠償を受け、請求・裁判で8年間を闘いました。「こんな判決では在宅介護なんかやってられないぞ」「裁判所は認知症のことを全く分かっていない」という皆さんの大きな声が最高裁に届き、逆転勝訴判決を得ることができました。皆さんには本当に感謝しております。これからが本番の認知症。皆さんが安心して在宅で、地域で介護ができる礎となる判決を世に送り出すことができました。今は本当に良かった、と喜んでいます。

裁判の過程ではメディアの応援もあり、その一員だった〇〇新聞社の〇〇さまの会に際し、最近思うことをお話しさせていただきます。

最近、「地域で支える」ということの意味についていろいろ考えています。様々な支え方があると思います。が、概念としてはわかるのですが、具体的には何をするか。私は最も大事なことは地域で認知症の人の命を守ることではないか、と思うようになりました。一人で外出して自宅に戻れなくなった行方不明の方の問題です。

ある市で講演した際、ある方が、「ある朝、近所の顔見知りのおばあちゃんに会った。ちょっと近所まで、と。結局そのおばあちゃんはその夜、山の中で凍死された。調査の結果、他にも同様に会話した人がいたことが判明、結局おばあちゃんは、認知症で帰宅できずに何故か山に入ってしまったらしい。」

「認知症であることを知っていれば絶対に止めたのに、本当に悔やまれる。」とおっしゃっていました。その市は市街地にすぐ山が迫った地形なのだそうです。

父は、家から外に出て水遣り、草むしり、ごみ拾いが日課でした。多くの顔見知りから声を掛けられ嬉しそうにしていますが、同時に、徐々に父の症状が近所に知れ渡っていくことにもなりました。私たち家族は当初ためらいがありました。「父がぼけたと噂されているにちがいない」「身内にこんな人がいるのは恥ずかしい」という気持ちです。まだまだ偏見もあるでしょう。しかし父は毎日生き生きと暮らしていました。私たちは最後は「父の好きにさせよう」と割

り切りました。

父は残念ながら誰にも止められずに駅構内に入ってしまった。しかし、父が認知症であることを知っている方から声を掛けてもらえた確率はゼロではありませんでした。

近所の多くの人が父の症状を知っていたからです。

父の自由を奪い、閉じ込めて、近所に内緒にしていたら可能性はゼロだったはずです。

認知症は恥ずかしい病気ではありません。まず、ご近所に知ってもらうこと、これが地域で支える第一歩だと思います。

また父は入れないはずの駅構内に入ってしまったのですが、夕方の帰宅時間帯でしたから、ホームで並んでいたとき、混む合う電車内に乗り込んだとき、隣合せた多くの乗客が、父を見かけているはずで。

父の帽子やジャンパーには、妻が名前や電話番号を記した名札が縫い付けられていました。多くの乗客が名札を見ているはずで。

私たちは裁判に当時の「認知症サポーター100万人キャラバン」を証拠提出しました。

今や、サポーターは1千万人を超えました。目標は1千2百万人となっています。

今なら、心あるサポーターの乗客から声を掛けていただけた確率は相当高くなっていると思います。今なら父は助かったかもしれません。父が亡くなった線路を現場検証した警部は「一見して認知症を患っていらっしゃる人だと分かった」と言いましたから。

「おじいちゃん、どこへ行くの」と尋ねれば、父は答えられなかったはずで。

私も経験しましたが、実際に声掛けをすることは大変勇気が要ります。また短時間で見極めることも大変難しいです。父は短時間なら認知症であることを悟られないよう上手にしゃべっていましたから。

しかし本日のこのような会を通じて社会全体の理解を少しずつでも深めていくこと、そして「よいおせっかい」をしていただくことが、最悪の事態を回避する第一歩だと思います。

私は、今は「今日はいい天気ですね。どこにお出かけですか」と尋ねて、後はじっと反応を窺うようにしています。

1万5千人を超す行方不明者、うち470名の死亡が確認された、との警察庁調査です。何とか地域で支えて減らしたいものです。

認知症はこれからが本番です。認知症は、誰もが成り得る病気で恥ずかしいものではありません。「うちのおばあちゃん、認知症なんです」「そうですか。長生きされた証拠ですね」と明るく話せる社会にしようではありませんか。

以 上